

お茶大「陸前高田実習」で何を学んだか？

わたしたちに何ができるか？

What did we learn in fieldwork practice of Ochanomizu University in Rikuzentakata?

What we should do for the places and the people in Rikuzentakata?

熊谷 圭知

お茶の水女子大学

概要：本報告では、2011 年 9 月から継続して実施してきたお茶の水女子大学の地域研究実習（通称「陸前高田実習」）の成果と課題について紹介する。わたしたちがこの実習を通じて陸前高田から何を学んだかを紹介するとともに、私たちが何を還せるのかについても考えたい。

abstract： In this paper, I discuss on the process and the result in the fieldwork practice of Ochanomizu University at Rikuzentakata since September 2011. I highlight what we (students and supervisors) learned there and what we should return to the places and the people in Rikuzentakata.

1. 実習構想の経緯

被災地をボランティア等で訪れる大学生は多い。しかし被災地に関心を寄せ、関わりたいと思いながらその機会を得られない学生はさらに多い。東日本大震災についてマスメディアを通じた報道が減退し、震災が過去の出来事となりつつある中で、大学生たちに大学教育を通じて被災地への関心を喚起し、持続的なかわりを促すことは大学の重要な社会的使命の一環でもあると考える。本報告の目的は、被災地でのフィールドワークに基づく実習がもつ可能性と課題を検討することにある。具体的な事例は、報告者が企画者・引率者として関わってきたお茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環の専門科目「地域研究実習Ⅲ」（2011 年度）「同Ⅱ」（2012 年度～2016 年度）である。

実習実現までの経緯は以下のとおりである。2011 年 4 月 20-21 日、熊谷は同僚教員・学生とともに初めて東日本大震災の被災地（気仙沼市、陸前高田市、大船渡市）を訪ねた。被災現場の生々しさとともに、隣接する 3 市の間にも被災の様相や程度に差異があり、あらためて現地を訪ねることの重要性を痛感した。大学で開催した報告会には多くの学生が集まり、被災地のために自分たちも何か関わりたいという学生の熱意を感じた。同年 6 月、熊谷が父の故郷という縁をもつ陸前高田を再訪し、同僚教員とともに米崎小学校の仮設住宅を訪ねた。自治会長の佐藤一男さんとの出会いの中で、住民の集まる場所がなく、NGO の支援で現在集会所の建設を計画していることを知った。同僚教員の発案に佐藤氏が賛同し、集会所にコーヒー機材を寄贈しコミュニティカフェをつくることになった。学生とともに継続的にこの場所を訪れるために、お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環の実習科目を活用することを企画した。グローバル文化学環は、2005 年にお茶大の文教育学部に創設されたコースであり、1) 地域研究、2) 多文化間コミュニケーション、3) 国際関係・国際協力の 3 つの領域を結び合わせ、グローバル化時代の市民の育成をめざしている。カリキュラムの中では、机の上だけでなく、国内や海外の現場を訪れて、身体と五感で学ぶ「実習」を重要な柱として位置づけている。

2. 実習の概要

最初の課題は現地での宿と交通手段の確保だった。宿舎については最初の 2 回は個人宅の離れを借り、その後は高田ドライビングスクールにお世話になった。市内の移動は、地元の方の運転するワゴン車（8 人乗り）で行なった。2011 年度は、1 回の現地訪問人員を学生 5 名に限り、3 回の訪問計 15 名の定員で学生を募集・選考した。現地実習（往復の夜行バスを含め 4 泊 3 日）のほか、事前学習、事後学習を数回ずつ行ない、ワークショップの形で最終報告会も実施した。現地での主なプログラムは、被災した市街地の見学、市役所・NPO 等での聞き取り、仮設住宅でのお茶飲み会や交流イベントなどである。当初気を配ったのは、苛酷な体験をした住民の方々とどのような会話をすることだった。学生たちには、こちらから話を聞き出さず「問わず語り」に耳を傾けるよう伝えた。訪問を繰り返すうち、住民の間にお茶大の学生がまた来たという信頼関係が生まれ 2 年度目の実習では、佐藤一男さんからぜひお茶大の学生に仮設住宅住民の震災体験を聴き取ってほしいとの依頼を受けた。聞き取りの一部を報告書の 2 号（『聞き取りから見える東日本大震災』）にまとめた。以来 2016 年度に至るまで、引率教員 1-2 名、院生 TA1 名（年度を通じて継続）、学部学生 5~7 名の体制で、毎年 4-5 回の現地訪問を続けている。現地訪問のほか、平均月 1 回程度、実習参加学生全員が参加するミーティングを開催し、オリエンテーション、現地を訪ねた学生の報告会（これから訪問する学生については事前学習となる）を行なう。年度末にはシンポジウムを行なって発表し、最後に報告書を編集・刊行している。

学生の参加者（TA を含む）は、2011 年度は 19 名（9 月の「お茶っこカフェ」オープニング参加学生 2 名を含む）、2012 年度は 21 名、2013 年度は 35 名、2014 年度は 25 名、2015 年度は 23 名、2016 年度は 27 名であり、合計 150 名となる。学生たちの中には、実習を契機に、個人的に陸前高田を再訪する者も多数生まれている。

3. 学生の学び

参加学生たちのほとんどは被災地を訪ねるのは初めての経験であり、不安と緊張感をもって陸前高田にやってくる。しかし米崎小学校の仮設住宅をはじめさまざまな場所で、温かく迎えてくれる人々に出会い、美味しいものを食べ、陸前高田が好きになる。そして、わたしたちに何ができるのかという大きな問いをもって帰っていく。そうした学生たちの感想のいくつかを紹介しよう。

- ・陸前高田では多くの人と出会いました。最も驚いたことは、陸前高田で出会った人たちはみな強く、優しい人たちであったということです...ボランティアに行ったはずが、私の方が元氣や優しさをもらって帰ってきてしまった。(2011 年度)
- ・英文学を専攻する私は、4 年生にして初めて「生きた学び」を、この陸前高田の実習で体験した。私は実際に被災した人の声を聞き、いまだ傷を負った場所を目にした。復興のために立ち上がる人々の熱い思いを聞いた。おばあちゃんたちとのおしゃべりを楽しみ、元氣な子供たちと遊んだ...自分とは地理的にも、社会関係的にも離れた場所での問題を、自分のものとして考える力を「当事者性、当事者意識」とよぶならば、私はこの授業でそれを持つ力が培われたのではないかと思う・・・被災地の一つとしての「陸前高田」ではなく、一人一人が生きている場所としての陸前高田だ。(2011 年度)
- ・私は今回の実習で、本当にわずかではあるが、被災者の心の奥底にある深い傷を知った。3. 11 から時間が止まっている人、心にぽっかり穴が空いている人、身近な人の死を嘆く人、生き残ってしまった自分を責め続ける人、現実を受け入れられない人、自分たちだけが前に進むのが、亡くなった方々に対して申し訳ないと思っている人...被災者の方々が抱える心の傷は、私には想像もできないほど深いに違いない...(2011 年度)
- ・市街を車で走る間、あたりを見回すと、平原に草が生えていて、一見のどかなようにさえ感じた...しかし市役所、消防署、体育館などの建物を見ていくと...多くの方が犠牲になった場所に立っていることを実感し苦しくなった。建物のありさまは津波の力を雄弁に物語っていて、実習メンバーとも話すことができずに言葉を失った。しかし、その後仮設住宅に向かう道程で山から海を見下ろし、その景色の素晴らしさにはっとした。そしてそれまでの被災地——無残な姿が残っていて復興途上で、つらい思い出が多い中で努力している場所——といったイメージだけでなく、今現在も変化し続けている、自然の美しい土地でもあるということに気づき、自分が先入観を持って陸前高田に来たのではないかと反省した。そして土地だけでなく人々に対してもありのままの姿を見ようと、自分に言い聞かせた。(2012 年度)
- ・本当に助けが必要なのは、イベントやコミュニティに顔を出すエネルギーもなく、ひとり仮設住宅でこもりきってしまった人々なのだろう。弱った部分は概して外からでは見えない。気になければ気付かない。多少心の整理がついた被災者だけを見て、「被災地の人は強いから大丈夫」と考えるのはあまりにも危険だ。私には、強さと弱さが平等に、同時に横たわっているように見えた。.....政治を後押しするものの一つは世論だ。私たちが見えぬものに目を凝らし、聞こえぬものに耳を澄ませる、そうした「関心を持ち続けること」がやがて世論となり、政治を動かすかもしれない。被災者の方々の将来は、きっと私たちの「関心の維持」にかかっている。(2013 年度)
- ・外部者の持つ可能性について考えた。私たちがこうして、被災地で見聞きしたことや感じたことを持ち帰ることで情報の共有ができるほか、直接的関わりを感じていない周囲の人々に自分自身の場所の体験を与えることができる...実習による実体験は、学生にある種の意識改革をもたらした。今の我々は外部者であるが、部外者ではないという思いである。そもそも、外部／内部という見方は相対的な評価で、分別することはできない、グラデーションのようなものだ。その中で、自分のいる位置も常に揺れ動きながら、今それぞれができることを考えることに意味がある。(2013 年度)

4. われわれ（企画者）の学び

わたしはフィールドワークを「調査対象が存在する場所に身を置いて、(文献や統計などでは得られない)一次資料を集める調査方法」と定義している。フィールドワーク実習としての陸前高田実習は、たいへん充実したものだった。その要因の第 1 は、被災地陸前高田という「場所」のセッティングの特異さである。被災地の風景を自分の目で見、さまざまな場所を歩き、いろいろ美味しいものを食べるという、身体性を通じた場所の体験は、学生にとってインパクトのあるものだった。第 2 に、拠点とさせてもらった米崎小学校仮設住宅とその集会所、そこでの「お茶っこ」カフェという「場所」の存在である。濃密な交流の空間と、学生たちの訪問の蓄積によって生まれた「お茶大生がまた来てくれた」と迎えてくれる関係性が緊張感のある被災地訪問の中で「ホーム」の役割を果たした。第 3 に、話を聞かせてくれた住民たちの語り、いずれもたいへんテンションの高いものであり、学生にメッセージを伝えたいという力にあふれていたことである。第 4 に、参加する学生たちのモチベーションの高さである。2 単位の実習の授業で、4 泊 3 日の現地訪問(すべて参加学生の自己負担)のほか、1 年間の月 1 回のミーティング(事前・事後学習)、シンポでの報告、報告書の執筆、と学生には負担の大きいものであったが、毎年応募者が定員を上まわり、途中で落後する学生は 6 年間で一人もいなかった。

課題もある。学生にとって、被災地という場所、生死に関わる体験を聞くことの苛酷さから受け取るショック、重さは、通常の実習の域を超えるものだった。また聞き取りの語り(プライバシーに関わる生々しいデータ)をどのように扱うか(プライバシーの保護と語りの文脈の保持の葛藤)という問題も未解決である。

5. 陸前高田の場所と人びとに何を還すのか——わたしたちに何ができるか

実習でお世話になった場所と人びとへのお返しとしてわたしたちがやってきたことは、実習の体験とそれに基づく考察をまとめた報告書を毎年作成し、関係者(仮設住宅住民、訪問先、図書館等)に贈呈することである。このほか学生たちは個々に、自らの体験を SNS 等で発信したり、留学先で海外の学生に伝えたりしている。陸前高田のファンになり、繰り返し訪ね続ける学生も相当数いる。

実習の中で私が期待しているのは、「外部者」である学生たちが、陸前高田という場所を体験することで、またそこに生きる人たちと(「被災者」としてではなく、人間として)交感することで、変化し、その思いをもち続け、いくばくか「内部者」になっていくことである。震災によって生まれた困難に関心を寄せ、自らも何か関わりたいと願う。その時点

でその人は、少なくとも「内部者」に近づく入口に立っているといえる。この被災地をめぐる内部者／外部者という問題について私見を述べることで小論を結びたい。

わたしたちは実習で外部者として陸前高田に関わりをもった。そもそも被災地における「内部者」（被災者）／「外部者」とは誰なのだろうか。「被災地」とは、災害を被った地域のことであり、「被災者」とは、災害を被った人のことだ。われわれが訪ねている陸前高田についていえば、被災の状況は地区によって様々だが、親戚や知人・友人の誰かを亡くしていない人などいないから、空間的には直接「被災」していなくとも、皆「被災者」であることには変わりはない。

しかし全員が被災者であるはずの陸前高田の住民の中にも、その意識に微妙な差異がある。わたしたちが何度もお世話になった、りんご農家の金野秀一さんは、震災直後から物資の確保など地域社会のまとめ役として奔走した人だが、自らを「在宅者」（家を流されなかった者）と位置づけ、家族を失った人や、仮設住宅に住む人にくらべればまだ恵まれていると語った。共同体の中に、震災を期に、肉親を失った者や家を失った者、どちらも無事だった者、といった線引きが生まれ、後者は自らを同様に「被災者」として語ることに躊躇している。このように「被災者」＝「内部者」も、けっして均質で一枚岩の存在ではない。

一方、東日本大震災の被災地という空間の外に自らの生活の本拠を持つ人が「外部者」だが、そうした外部者が多数、ボランティアなどとして被災地を訪れ、様々な体験をしたのが、この震災の特徴である。そうした外部者の中には、SETの三井俊介さんのように、陸前高田に住み着いてしまった人もいる。また桜ラインの岡本翔馬さんのように陸前高田出身者で、この震災を契機に陸前高田に戻り、さまざまに活動している人も多い（それは震災を期に他の場所に転出した人に比べればはるかに少数であるにしても）。

しかしそれはもちろん「外部者」が自らの思いだけで、簡単に「内部者」としての理解や協働が可能だということを意味しない。わたしたちは「当事者」ではないからだ。震災を直接体験しておらず、失ったものがない外部者は、直接には震災の当事者ではない。実習の中でわたしたちは震災に関わる体験をたくさん聞いてきた。しかし語られない（聞くことができなかった）話もたくさんあったはずだ。それは遺体安置所で近親者を探した体験であったり、家族を亡くした方の消え去ることのない悔恨や哀惜の情かもしれない。そこには外部者が踏み込めない（踏み込むべきではない）一線がある。

「当事者」は、日本語では事件や問題の当事者というようにもっぱらネガティブな意味合いを持つ語として使われてきた。上野千鶴子は、『ケアの社会学』の中で、当事者をケアという「自己のニーズを充足されるべき権利」を持つ主体として捉えなおそうとしている。そのニーズは、単に第三者によって客観的に規定され、与えられるものではなく、様々なアクターによる相互行為と交渉過程の中で生成される（上野 2011：65-84）。

震災の問題についての「当事者」を考えようとするとき、どのようなことが言えるだろうか。被災者はけっして「可哀想な人たち」として同情されるべき存在でもなければ、外部の支援に依存する無力な存在でもない。しかし震災によって「理不尽な」被害を受け、様々な物を奪われた被災地／被災者は、やはり上野が言うように「自己のニーズを充足される権利を持つ主体」という意味での「当事者」として捉えられる。

そのニーズは、震災からの様々な意味での「復興」である。その対象となるのは産業、公共施設や商店を含む市街地、住宅といった目に見える、経済的・物質的なものだけではない。そこには、住民の精神的ストレスを含む健康や、コミュニティの社会関係、人々が愛着と帰属意識を持てるような風景や風土といった心理的、社会的なものまでも含まれる。そうしたニーズが単に第三者（たとえば行政）によって客観的に規定され、与えられるのではなく、様々なアクターによる相互行為と交渉過程の中で認識され、生成されるものであるとするならば、その多様なニーズを個人的な違和感や愁訴にとどめずに共有し、その克服や実現を権利として要求していくためにも、そこに外部からかかわるさまざまな主体の存在と、そのかかわり方が重要になってくるのではないか。

わたしが考えるのは「場所」の再構築である。わたしは「場所」を「空間的な近さによって生み出される人と人、人と事物、事物と事物の関係性の束、またそれが実体化した空間」（熊谷 2013:8）と定義している。陸前高田という濃密な場所は、様々な人と土地を基盤にするかかわり（たとえば海産物と農産物を交換するといった社会関係）によって、また気仙川や高田松原をはじめとする風景（熊谷 2011）へのかかわりと愛着などによって、長い時間をかけて紡がれてきた。その喪失感・剥奪感のはかり知れないが、経済的には換算されず、補償もなされえない。被災地で進められる「復興」は、経済的・物質的な側面に偏る傾向がある。これに対しオルタナティブな復興の在り方を構想し、提言していくためにも、被災地の「場所」の喪失(displacement)と被災者の葛藤を、その感情も含めて掬い取る丁寧なフィールドワークと、協働を通じたあらたな場所構築が希求されよう。

外部者はただちに当事者ではないかもしれない。しかし震災の体験は、日本に生きている限り私たち自身がいつ震災の当事者になるかもしれないということを教えてくれる。わたしたちは、そのような意味で単なる外部者や第三者ではありえないところにすでに身を置いている。震災の被害の結果としてだけでなく、当事者と外部者との相互作用と交渉の結果、当事者と当事地域に生まれる「ニーズ」の生成に寄与し、それに対して責任をもちつつかかわり続けていくこと、それが私たち「外部者」の役割なのだと思う。

参考文献

- 上野千鶴子(2011)『ケアの社会学——当事者主権の福祉社会』太田出版。
 熊谷圭知 (2011) 風景を失うことの意味——陸前高田と原風景をめぐる、幼児の教育 111(1)：54-58。
 熊谷圭知 (2013) 場所論再考。お茶の水地理 52：1-10。

著者紹介

熊谷圭知（くまがい・けいち）：お茶の水女子大学文教育学部教授。東京生まれ。父は岩手県陸前高田市、母は盛岡市出身。専門は社会文化地理学・オセアニア地域研究。1979 年からパプアニューギニアのフィールドワークに従事。都市移住者の掘立小屋集落や、奥地の村に通い続ける。
 住所：〒156-0043 東京都世田谷区松原 3-23-19-B103, E-mail:kumagai.keichi@ocha.ac.jp



ポスター発表

※下記タイトルのポスター発表論文は「オーラル（口頭）発表」に掲載
「希望のあかりプロジェクト2011-2016」
（間間 理、榊 泰輔ほか）
「青山学院大学ボランティア・ステーション 陸前高田プロジェクト」
（柳田 泰樹、宮澤 和浩）

岩大 E_code プロジェクトについて

On the “Gandai E_code” project

岩大 E_code

五味壮平¹・越戸浩貴²・小松美沙紀²・佐藤志穂²・椎名雄資²・
鈴木愛美²・盛内成太一²・菅野郁恵²・田村裕樹²・藤原かおり²・
斉藤生恵²・菅原有美²・曾根明恵²・城守理佳子²・松田唯香²・佐々木裕康¹・
嘉村祐人¹・武田桜¹・小山内慈¹・
及川智輝¹・菊池玲花¹・田代華奈子¹・高梨翔太¹・照井絢子¹

岩手大学¹ 岩手大学卒業生²

概要：本稿では陸前高田を応援することを目指す有志団体「岩大 E_code」のこれまでの活動の概略を紹介し、その意義と課題について検討する。

abstract： In this article, we introduce the activity of the group named “Gandai E_code”, which is a team for encouraging the people and the city of Rikuzentakata. We also discuss the values and problems of those activities.

1. はじめに

2012 年 1 月、オープンが間近にせまっていた陸前高田市の仮設商店街（桝ヶ沢ベース）に入居予定の事業主の方々から、岩手大学の学生たちが店舗再開後の戦略を提案する機会をいただいた。この機会をきっかけとして、2012 年 4 月、岩手大学の教員（五味）と学生数名による岩大 E_code という有志団体が立ち上がった。本稿では、陸前高田を応援する団体として、岩大 E_code が行ってきた活動の概略を紹介し、その活動の意義と課題について検討する。

2. 岩大 E_code の活動の概略

岩大 E_code の活動は、高田市民のさまざまな方々との出会いと対話をもとに、自分たちにできることを手探りでるところから始まった。活動の比較的初期の段階から自分たちにできることは情報発信であると考え、陸前高田に関する情報誌の作成を目指すことになった。また団体そのもののミッションを、「陸前高田市民を中心とし、陸前高田に関心を寄せる人々により構成される拡大コミュニティ¹⁾」の形成・維持・発展の一助になること、陸前高田市の内部と外部のつなぎめの一つとなることとし、情報発信はその手段として位置づけた。

2012 年度は、桝ヶ沢ベースのオープニングイベントの企画実施後、情報誌「いいことマップ」Vol. 1～Vol. 4（図 1）を発行した。『いいことマップ』、陸前高田を訪問している人たちに訪問中の体験をより深いものにしてもらいたいという思いのもと、E_code メンバーがとらえた陸前高田の魅力を取り上げた冊子である。各号の特集は「桝ヶ沢ベース」（Vol. 1）、「2012、陸前高田、夏。」（Vol. 2）、「みんなが集まる あたたかい場所」（Vol. 3）、「陸前高田未来マップ!!」（Vol. 4）となった。それぞれ 6000 部～7000 部刊行され、市内外・県外広くで配布・頒布された。『いいことマップ』は第一義的には高田市外の人向けに制作されたものであったが、市内の方にも少なからず手に取っていただき、様々なコメントをいただいた。

2013 年度に入り、初期メンバーの多くが卒業で大学を去ったことで中心メンバーがほぼ入れ替わった。この年度の初めに、E_code の働きかけによって 500 人の人に陸前高田にきてもらうことを作業目標として設定した。この頃市内では、仮設商店街の協議会設立を探る動きがあり、「市外から一本松を見に来てくれる人は多いけれど、せっかく営業している仮設商店まで足を運んでくれる人が少ない。」「どこで営業しているかわからないのではないか」「看板の設置や店舗を網羅的に紹介するメディアが必要だ」といった声が聞こえていた。E_code 側でも、これまでとは違ったガイドブックを作成してみたいという議論があった。そこで、E_code から手を挙げる形で、市内店舗を紹介するための情報誌『たかたび』の作成プロジェクトがスタートした。このプロジェクトは、陸前高田未来商店街、高田大隅つどの丘商店街、桝ヶ沢ベース、再生の里ヤルキタウン、陸前高田元気会、そして陸前高田市商工観光課の協力のもとに展開された。作成プロセスにおいて、上記作業目標も鑑み、E_code のメンバーが取材するだけでなく、市外のさまざまな方に呼びかけて高田に足を運んでもらい、取材・撮影・文章作成までをお願いする形にしようということになり、「ガイドブックキャンプ」という企画を夏休み期間に三度実施するなど、取材、文章作成の機会を提供した。最終的に『たかたび』は約 100 頁のボリュームある冊子となり、2014 年 2 月に 1 万部発行され、陸前高田市内、岩手県各地、宮城、東京ほか全国各地で配布された（図 2）。



図1 『いいことマップ』



図2 『たかたび』・『たかたび+』

2014年度は、前年度刊行できなかった『いいことマップ』Vol.5(特集「高田もの語り」)とVol.6(特集「陸前高田の芸術が、熱い!」)(図1)、そして『たかたび』発刊後にオープンした飲食店や宿泊施設を紹介する小冊子『たかたび+』(図2)の刊行をおこなった。陸前高田という地域や人々への理解と関係性もそれなりに深まってきており、復興グルメF1大会への協力、岩手大学1年生の被災地学修へのアテンド、各地での物産展等のイベントの主催や協力、高田訪問者のガイドなど、より多彩な活動を展開するようになってきた。

2015年度に入り、これまで作成してきた情報誌はそのターゲットがあいまいであったとの反省から、ターゲットをより絞り込んだ冊子を作るべきとの議論がなされた。その結果、岩手県内在住、かつ大学生など若者を主たる読者として想定し、陸前高田に興味をもってもらうことを意図した情報誌『だいぶそこまで』春号(特集「陸前高田xおしやれ」)を制作・刊行することになった(図3)。またこの年度には、栃ヶ沢ベースの仮設店舗の壁面を活用し震災後の歩みを可視化しようとする掲示物「万歩計」の制作・展示、陸前高田市商工観光課が取り組み始めた外国人に対する環境整備のための「VISIT TAKATAプロジェクト」への協力(市内飲食店・宿泊施設のメニューやサインの英語化)などにも取り組んだ。

2016年度は『だいぶそこまで』春号の続編として、そのコンセプトやターゲットを引き継ぎつつ、サイズなどの改良を施した秋号(特集「山の温泉、海の温泉」)を9月に刊行した(図3)。また、学内にふえてきた地域応援団体にE_codeが呼びかけ、計7団体がコラボするイベント「いわて ぬぐだまるフェア」を盛岡市の商業施設クロスステラスにて11月に開催したところである。

5年強の間に、E_codeの活動にはかなりの学生が参加することになったが、正式メンバーとしては過去15名が卒業し、現在も8名が所属している。これ以外に他の大学所属学生も含め、準メンバーとして活動を支えてくれた学生も少なくない。



図3 『だいぶそこまで』

3. 岩大 E_code の活動の意義と課題

震災後5年を経過した時点で振り返った時、E_codeの活動には以下のような意義があったと考えている。

1) 情報誌そのものの価値

まずは制作した情報誌自体にそれなりの意義があったとは言えるだろうと考えている。特に『いいことマップ』

や『たかたび』など初期の制作物については、事前の予想以上に地元の方々に手に取っていただき、また興味を持ってもらえたという手ごたえを感じられることが多かった。また、市外の人々からは例えば SNS などコメントをいただけることが多かった。Ecode の活動に対する twitter 上のコメントのアーカイブにどのように評価されたかが残っている (<https://twitter.com/Ecode1/likes>)。しかし、こうした評価は、震災後の時間の経過とともに減少傾向にある。一般に、紙メディアの媒体は、どこの誰にどのように読まれたかということが把握しづらい。制作側の目的や意図（たとえば「岩手県の若者に陸前高田に関心をもってもらうこと」）がどの程度達成されたかについては本来検証がもっとしっかり行われるべきである。一方で発行から時間が経ってきたことで、震災後の陸前高田市の状況や大学の活動を記録するアーカイブとしての価値も出始めていると考えられる。

2) 学生たちが継続的に陸前高田に通い続けたということ

岩大 Ecode の活動、あるいはそこから派生した活動のもとで、震災後 5 年以上でのべ数百（千？）名規模の学生たちが陸前高田に通い続けることになった。地元の方々に名前と顔を覚えてもらい、かなり親密な関係性を構築した学生も少なくない。高齢化、少子化が進行する被災地に、若者たち（しかも地元の大学生たちが）が継続的に来続けているという状況を作りだせた効果は間接的かもしれないが、それなりにあるだろうと考えている。

3) 卒業生の貢献と関係性の継続

岩大 Ecode を引退後、陸前高田をはじめ気仙地方に住み、働いている、あるいは働く予定の卒業生が複数存在する。貴重な若手の働き手として活躍している。これら以外の卒業生のなかにも、卒業後に陸前高田市を訪問し続けているものが少なくない。メンバーそのものが活動を行う中で、陸前高田市への愛着を深め、拡大コミュニティの一員となってきたと言えるだろう。

4) 情報誌の取材活動などを通じた市民と大学との関係性の形成

Ecode が取り組んできた情報誌を制作し情報発信を行うというプロセスの実践は、結果的に、多様な市民と知り合い関係性を構築することに直接的につながってきた。この積み重ねの効果は大きく、陸前高田をめぐる状況や市民の感じ方・考え方、さらにはこのまちの文化や歴史などに関する理解も深まった。教員メンバーである五味は、そうした理解を、盛岡周辺での陸前高田ゆかりの人たちのコミュニティづくり、まち・ひと・しごと総合戦略策定のための会議、復興祈念公園の協働体制構築に関するワーキンググループ、岩手大学と立教大学との協働で検討を進めている陸前高田グローバルキャンパスなどの場で活かす努力をしているところである。

5) 拡大コミュニティ形成というミッションに照らして

団体のミッションである「拡大コミュニティの形成・維持・発展」への貢献については、市内の人々との結びつきはともかく、市外の人たちとの関係性をもっと構築できればよかったと考えている。また、市外の人たち同士のネットワーク化・コミュニティ化への働きかけも弱かった。しかし 20 代～30 代の若者、とくに陸前高田出身、岩手出身の若者たちとメンバー学生たちはそれなりのネットワークを形成した。将来的に、こうしたつながりがいきる場面が出てくる可能性はあると考えている。

6) 学生たちの学び

Ecode の活動に対して、当初、五味の研究室のゼミ生として演習や卒業研究として取り組んできたメンバーもいたが、参加できるメンバーに制約が生じる、あるいは単位になる学生とならない学生が混在する、というのはよくないという判断から、原則として課外活動として位置付けられるようにした。課外活動としては、相当なエネルギーと時間が必要なものとなり、学生によっては本業とのバランスを取るのが難しい時期を経験したものもいたかもしれない。しかし、それでもなお、一これは、あくまで大学側の立場からみたメリットということであるが、陸前高田に通い続けるという経験を通して学生たちが得た学びは限りなく貴重なものであったと考えている。

4. おわりに

以上、岩大 Ecode の取組について振り返ってきた。あくまで途中経過としての報告である。

本稿では、拡大コミュニティという概念とその具体的な形、そして形成・運営方法については触れることができなかった。別の機会にゆずることにしたい。

また岩大 Ecode の活動を展開するプロセスにおいては、その活動の意義について常にふりかえり、自問し続けることになった。Ecode が行ってきたような情報発信は、復興プロセスのなかで不可欠とは言えないのではないかと、いう半ば脅迫的な意識が常に存在していたからだと思われる。岩大 Ecode の活動に限らず、災害後に行われる様々な取り組みで、あらゆる立場や観点から「不可欠」あるいは「絶対的に正しい」と言える活動は比較的少ないといえるのではないかと。特に「大学として、あるいは学生たちは被災地とどのように関わるべきか／関わるができるのか」という問いは、災害後に大学関係者が抱えるきわめて一般的な問いであると言えるだろうと考えている。もちろん、ボランティア活動というのはその一つの在り方であるが、いわゆるボランティア活動にも課題は少なくないであろう。ちなみに岩大 Ecode の学生たちには、ボランティアや支援に携わっているという意識はほとんどない。

「大学として、あるいは学生たちは被災地とどのように関わるべきか／関わるができるのか」という問いについて、我々なりの答えを出すことは、東日本大震災の被災県にある大学に在籍し、震災後の活動に携わったものとしての一つの責務だと考えている。この問題についても別の機会に論ずることとする。

謝辞

岩大 Ecode の活動は、陸前高田市民の皆さまをはじめ、陸前高田にゆかりのある多くの方々に支えられてきました。また岩手大学内部においては、一連の活動は「三陸復興推進機構」(2016年より「三陸復興・地域創生推進機構」)のサポートのもとで行われ、「三陸沿岸地域の「なりわい」の再生・復興事業」(文部科学省)、「気仙地区(学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生事業)」(岩手県)、「教育研究改善プロジェクト」経費(岩手大学人文社会科学部)、そして音楽グループ「スターダスト☆レビュー」とそのファンのみなさまから提供いただいた寄付などによって支えられてきました。この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

注

1 ちなみに、活動開始直後は、拡大コミュニティではなく独自に「広域コミュニティ」という言葉を使用していたが、廣田部門長が「拡大コミュニティ」という概念を提唱されていることがわかり、同じ大学で類似概念に違う名称を付けるべきではないと考え、「拡大コミュニティ」にあわせることとした経緯がある。

著者紹介

五味壮平：岩手大学教授。人文社会科学部・三陸復興・地域創生研究センター・地域防災研究センター。専門は情報学。2012年より陸前高田にて岩大 Ecode プロジェクトを開始。2014年から高田松原津波復興祈念公園 協働デザインワーキンググループ、2015年から「陸前高田市まち・ひと・しごと総合戦略策定会議委員」に従事。

住所：〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-34, E-mail: gom@vate-u.ac.jp



岩大 Ecode メンバー：

越戸浩貴・小松美沙紀・佐藤志穂・椎名雄資・鈴木愛美・盛内成太一・菅野郁恵・田村裕樹・藤原かおり・斉藤生恵・菅原有美・曾根明恵・城守理佳子・松田唯香・佐々木裕康・嘉村祐人・武田桜・小山内慈・及川智輝・菊池玲花・田代華奈子・高梨翔太・照井絢子



Fieldwork Practice and Commitment within a Tsunami-hit Area:

Ochanomizu University Students in Rikuzentakata city, Iwate Prefecture, Japan*

Keichi KUMAGAI (Ochanomizu University)

Yukiko NAKAMURA (Graduate student, Ochanomizu University)

Takashi ODA (Miyagi University of Education)

*this paper was originally presented at a poster session in the annual meeting of the Association of American Geographers held at Chicago, April 2015.

abstract : The Great East Japan Disaster occurred on March 11, 2011 gave tremendous damage on coastal areas in Tohoku region, Japan. Rikuzentakata city is one of the worst, where 7 % of the population died and almost half of the houses were destroyed by tsunami. We are continuously sending undergraduate students for their fieldwork practice since September 2011. It is quite difficult to organize such course in tsunami-hit area which gave much burden to students both physically and mentally. We started the practice under the principle of “hearing without asking” as the people in the disaster area were supposed to be too sensitive to talk their experiences. After continuous visiting one particular temporary housing area we were accepted and formally requested by the residents to hear their distress. We are collecting and recording the stories as lessons for the future prevention of disasters. How the outsider can make a positive commitment to the restoration of the disaster area is quite difficult question. But we surely believe outsiders should have a fair responsibility to accompany with crucial “needs” of the people which not only fixed and provided by municipal authorities but also generated and renovated by the process of interaction between the insiders and the outsiders.

1. Background of the Fieldwork Practicum: Rikuzentakata City and its Damage by Tsunami

The Great East Japan Disaster that occurred on March 11, 2011 resulted in tremendous damage to the coastal areas of Japan's Tohoku region. Rikuzentakata was one of the most badly damaged cities in the tsunami disaster. The total death toll currently stands at 1,535 persons with 214 persons still missing. This figure represents a loss of 7.2% of the total population. 3,805 houses almost half of all houses in the city were totally destroyed.

Almost all public facilities were destroyed, including City Hall and the City gymnasium. The latter served as the first evacuation area was hit by the tsunami and totally submerged up to its ceiling resulting in more than 100 deaths with only a few survivors. The 232 km² area of Rikuzentakata consists of many different localities including Takata cho, the administrative and commercial center, and Yonesaki-cho, the agricultural areas and fishing villages. The township is situated in the flood plain of the Kesen River where the waters are clean and *ayu* (sweetfish) fishing attracts many anglers in the summer. The mineral-rich river delivers nutrition to the sea and provides for the premium quality oysters and scallops in the region. Takata-matsubara, once selected as having one of Japan's 100 most beautiful landscapes, has more than 70,000 pine trees lining its beaches and served as a popular tourist spot for sea bathing in the summer season. However, all but just one pine tree later called “the miraculous lone pine tree” and made a symbol for the city's restoration were totally wiped out by the tsunami. Loss of landscape is a serious damage to local residents although it is not measured economically.

2. Background and Practice of the Fieldwork Practicum

Since September 2011 (the 2011-2012 academic year), the Department of Global Studies for Inter-cultural Cooperation at Ochanomizu University has been fostering student fieldwork practice within areas affected by Japan's 2011 disaster through a course known as our Local Research Practicum. The core of this program includes visits to affected urban zones, holding social events, and listening to personal accounts at the temporary housing units, as well as to the city office and local reconstruction assistance NGO. We have a base established with one specific temporary housing community at the Yonesaki Elementary School. Here, we have donated a coffee maker and other materials to initiate a community café, later named “Ochakko Café”. (“Ochakko” means “tea” or “having tea together” in the local tongue).

We took special care in considering how to engage in conversation with those staying in temporary housing, each of whom had undergone extremely difficult experiences. We instructed students not to probe for information but simply listen without posing questions, so as to let people tell their own stories as they liked.

After several continuous visits to the area, Mr. Kazuo Sato, head of the Yonesaki Elementary Temporary Housing Residents', requested that we listen to their accounts of the disaster and record their stories. We decided to conduct informal interviews with the residents while keeping the points listed below in mind (and in memo form). During interviews, we were not overly concerning with whether each was answered, or the order in which they were approached. We transcribed the audio and matched transcriptions to notes taken to form a basic record. From these, students produced a report, covering: 1) Experiences on the day of the disaster, 2) The following day/s, 3) Life at the

evacuation center, 4) Life in temporary housing, and 5) Lessons. The interviews were conducted at the meeting room of temporary housing area (picture 7) or each temporary house. Another interviews were also made in fishery cooperative association's office at Wakinosawa harbor. We made In February 2014, we published a two volume report titled A View of the Great East Japan Earthquake and Tsunami from Personal Accounts.

3. Findings and Reactions of the Students Participated in the Fieldwork

We are continuing this fieldwork course at Rikuzentakata in 2012, 2013, 2014, 2015 and 2016. More than 150 students visited Rikuzentakata city since 2011 in this fieldwork course as well as private visits.

Some comments from students who participated in the practicum are as follows.

"We met many people in Rikuzentakata. What impressed me most was the strength and tenderhearted nature of each person we met. We went there to volunteer and help them but, actually, they were the ones who instilled strength and tenderness in us."

"Through this practicum I came to know of the deep pain and hurt experienced by the tsunami survivors, even just only little bit. One person lived as if time had stopped on March 11; one had a hole in their heart; one grieved for the deaths of loved ones; one blamed themselves for surviving; one was unable to accept the reality; one felt guilty for moving forward while leaving the dead behind...Each person experienced hurt and pain at a deeper level than I can imagine."

I first experienced "vital learning" after four years in university. I listened to the voices of survivors and saw their lingering hurt. I was able to hear their passion for getting back on their feet to work for restoration. I enjoy talking with women of my grandmother's generation and enjoyed playing with children so full of life... I learned in the practicum something that I call "a sense of being part of the people concerned", which is to say that I can think about things that occur in a distant place and in a community different from my own as an event that concerns me too. I don't see Rikuzentakata as a singular place that has become a tsunami-affected area, but as a place where multiple people are living.

Students noted the follows; *When listening to personal accounts, interviewers were often energized by the warmth exuded by disaster survivors. Also, we noted that many people involved in volunteer-based support activities were disaster survivors themselves an observation that underscores how, in fact, little division exists between "supporters" and "the supported".*

Future issues facing the disaster-affected areas are not limited to physical infrastructure, but also include the extremely important endeavor of creating community and communal spaces for people to gather. The key elements within human relations are those of empathy and solidarity in other words, feelings of closeness and mutuality.

At this point in time, the weighty emergence of this disaster has prompted a questioning of Japanese society itself, as well as its very ideals. As we pursue answers, the starting point must lie in the concept of a communal society. From there, we should focus on the power produced by our local communities and each individual comprising them, and continue to think about what we can do to contribute in this regard.

4. Concluding Remarks: Creating Connections

In the words of Kazuo Sato, the head of the residents' association of temporary housing area in Yonesaki primary school, "Don't just listen to our stories. Share them with numerous people after you return home. That's your homework. The ultimate achievement would be to have children hear our message, enabling them to find safety (in the event a disaster occurs)." Indeed, we should not stop with simply listening to peoples' accounts. We can and must pass along their knowledge and experiences relating to the tsunami.

Future issues facing the disaster-affected areas are not limited to physical infrastructure, but also include the extremely important endeavor of creating community and communal spaces for people to gather. The key elements within human relations are those of empathy and solidarity in other words, feelings of closeness and mutuality.

At this point in time, the weighty emergence of this disaster has prompted a questioning of Japanese society itself, as well as its very ideals. As we pursue answers, the starting point must lie in the concept of a communal society. From there, we should focus on the power produced by our local communities and each individual comprising them, and continue to think about what we can do to contribute in this regard.

The fieldwork practicum within tsunami hit areas is a difficult but stimulating task for the students as well as the academic supervisors. Our task still remains. Students' motivations are high—and their experiences great—but at times listening to the hardships of survivors grew to be a burden too large for them to bear. Another question is how we, as outsiders, can make a positive commitment to the restoration of the disaster-affected area. Indeed, this is a difficult question. But we certainly believe outside parties have a responsibility to accompany communities on their journey and attend to critical needs. These needs should not only be addressed by municipal authorities but also further attended to through processes of interaction between the community itself and outside parties.

陸前高田市での経験を熊本へー 東北からの熊本地震被災地支援活動

Experience in Rikuzentakata to Kumamoto- Support for Kumamoto earthquake stricken area from Tohoku

今本 亘¹

¹ 東北大学

概要：本稿では5月、6月、8月、9月、11月にそれぞれ行われた第1次～第5次東北大学熊本地震復興支援派遣について、その活動内容と、活動を通しての感想、および陸前高田市での活動経験が熊本地震復興支援にどのように役に立ったと思うかについて、一学生の実感を記す。

abstract：In this article, we explain support for Kumamoto earthquake stricken area by Tohoku university and how useful experience in Rikuzentakata is.

1. はじめに

東日本大震災当時に全国から頂いた支援への恩返しという観点から、東北にある東北大学としても是非支援活動に取り組むべきであり、また東日本大震災による被害からの復興ボランティアに取り組んだ経験は、熊本地震からの復興支援に生かすことができるという考えのもと、東北大学にてボランティア活動に携わる教員と学生が派遣された。

本稿では5月、6月、8月、9月、11月にそれぞれ行われた第1次～第5次東北大学熊本地震復興支援派遣について、その活動内容と活動を通しての感想、および陸前高田市での活動経験が熊本地震復興支援にどのように役に立ったと思うかについて、一学生の実感を記す。

2. 活動概要

- (1) 第一次派遣 実施期間：5/2～5/5, 派遣人数：教員1名 学生3名
5/2__主な活動内容：熊本視察, 熊本大学訪問
5/3__主な活動内容：避難所調査, 家屋の瓦礫撤去 (美里町)
5/4__主な活動内容：足湯活動 (御船中学校 避難所)
- (2) 第二次派遣 実施期間：6/3～6/5, 派遣人数：教員1名 学生3名
6/3__主な活動内容：視察
6/4__主な活動内容：被災された住宅内の片付け (大津町), 足湯 (城東小学校 避難所)
6/5__主な活動内容：引っ越しのお手伝い (御船町テント村), 足湯 (サンライフ熊本)
- (3) 第3次派遣 実施期間:8/4～8/7, 派遣人数：教員2名 学生2名
8/4__主な活動内容：熊本大訪問 (熊助組、学生支援課)
8/5__主な活動内容：倉庫の片づけ (西原村), 視察 (益城テクノ仮設住宅団地)
8/6__主な活動内容：竹の水鉄砲、バルーンアートで遊ぼう! 企画 (御船町スポーツセンター避難所)
8/7__主な活動内容：熊大工学研究科長と会談, 視察 (熊本大、西原村、大津町、益城町、南阿蘇村など)
- (4) 第4次派遣 実施期間:9/2～9/10, 派遣人数：教員1名 学生5名
9/2__主な活動内容：視察 (熊本市、熊本城)
9/3__主な活動内容：熊本ねぶた
9/4__主な活動内容：熊本ねぶた片づけ
9/5__主な活動内容：熊本県立大学との交流
9/6__主な活動内容：視察 (益城町、御船町)
9/7__主な活動内容：熊本大学との交流会
9/8__主な活動内容：足湯、手芸 (御船スポーツセンター、益城町テクノ仮設)
9/9__主な活動内容：がれき撤去 (西原村ボランティアセンター)
9/10__主な活動内容：IKIMASU 熊本
- (5) 第5次派遣 実施期間:11/18～11/20, 派遣人数：教員1名 学生4名
11/18__主な活動内容：移動
11/19__主な活動内容：足湯、カフェ、お祭りに参加 (木山仮設、益城町テクノ仮設)
11/20__主な活動内容：足湯 (益城町テクノ仮設 D→B)

3. 熊本派遣を経ての感想

足湯に限らずいずれの活動であっても、傾聴の姿勢でもって臨み住民の方の心の支えとなれるように心がけた。

九州の方々は明るい方が多く、話しぶりからも元気のように感じることがあったが、時間をかけ深く話し合ううちに、あるいは一対一で向き合った途端に、不安や割り切れない想いを口にする方、中には涙を流される方もいらっしやった。特に5月に行った避難所の調査で、運営の難しさやパニックに陥っている方々に対してリーダーシップを発揮することの苦労をお聞きしたことが印象的である。片付けを依頼されたために損壊したお宅に上がらせてもらったりもしたが、震災から生活を立て直すことは、ニュースで聞くよりもずっと大変だと痛感した。

とにかく住民の方だけでは回復は難しく、求められているボランティアは数も種類もたくさんであることが明らかに思われた。また熊本の住民の方と一口に言っても、熊本市内に比べ益城や御船は復興が遅れている、あるいは経済的にゆとりがあるか否か、震災以前の人間関係はどのようなであったか、住民の気質はどうかなど、その立場や状況や性格は大きく異なっており、一人一人の問題に注意する必要があるようだった。

4. 陸前高田市での活動経験を生かすことができたか

まず、「東北から支援に訪れた」という事実が喜ばれることが多かった。遠いところからわざわざ来てくれたという点と、東日本大震災の復興がまだ忙しいはずなのにという二つの意味合いで嬉しく思っていただけだった。また震災直後だからハード面での復興が比較的的重要視されているように見え、ボランティア活動を行う人々の内においても、いち早い復旧が優先されているような印象を受けたが、他の人々に比べ一層心に寄り添う支援ができたと思われる。普段の活動を通して理解した心の支援の重要性を心に留めながら行動することができ、交流を通して熊本に本拠地を置く学生ボランティアメンバーに一人一人と向き合う大切さを伝えることもできたと思われる。

話がそれるが、逆に自分たちにとって学びとなる事柄が大変大きかった。熊本の大学生が避難所の運営を行ったことや、物資の余っている地域への物資配給ボランティアというニーズにそぐわない活動に居合わせるなど、様々な活動を通し、今後大規模な震災が生じることを想定した際に、自分たちは何を備えておけるか、発生してからは何ができるかを考えさせられた。

著者紹介

今本 亘：東北大学文学部二年生、専門はフランス文学。2015 年より東北大学陸前高田応援サークルほかほかにも所属し、陸前高田市を中心にボランティア活動に取り組む。
住所：〒980-0871 宮城県青葉区八幡 2-15-12 菅正ビル 212, E-mail:wtaboowy@gmail.com



陸前高田と縁を結ぶプラットフォームとしての「聞き書き」

Kikigaki as Matchmaking Platform with Rikuzentakata

長谷川伸¹

¹関西大学

概要：関西大学商学部長谷川ゼミナールは2012年から陸前高田で「聞き書き」を継続して行ってきた。「聞き書き」とは、話し手と聞き手（ゼミ生）が一对一对向き合い、2時間程度で話し手のこれまでの人生を丸ごと聞き、それを話し手の言葉で文章にまとめることである。「聞き書き」がもたらすものは、第1に、話し手が暮らす土地（被災地）に愛着が生まれ、話し手（被災者）と聞き手（学生）は親戚や家族のような関係になり、長期にわたってその交流は続いていく。遠隔地大阪の学生が被災地・被災者と縁を結ぶ「聞き書き」は、長期にわたって震災を忘れず、被災地・被災者を思い、関わっていくためのプラットフォームと言える。第2に、聞き手（学生）にとって話し手は、人生の先輩であり、生まれ育った環境も、価値観・世界観も異なる存在である。であるがゆえに「聞き書き」は、聞き手（学生）にとっては自らの生き方を見直す機会となり、話し手が聞き手の心に宿って「もう一人の自分」となる。

Abstract: Hasegawa Seminar of Kansai University uses the Kikigaki approach to interview residents of Rikuzentakata from 2012. Kikigaki (it literally means: listening and recording) is a project that inquires into and records through one-on-one dialogue the stories of interviewees' lives and values. These narratives are then transcribed and summarised in reports that preserve the flavour of the interviewees' way of speaking. As results of this project, Kikigaki produced 2 good results. First, relationship between interviewee (residents of Rikuzentakata) and interviewer (seminarian) will be like family by Kikigaki. Then, Kikigaki is matchmaking platform with Rikuzentakata for students who live in a distant place (e.g. Osaka). Second, for interviewer (seminarian), interviewee (residents) is elder who lives in different culture and values. So, interviewer (seminarian) can take an opportunity to reflect his/her life and values by Kikigaki.

1. はじめに

本稿では関西大学商学部長谷川ゼミナールが2012年から陸前高田で継続して行ってきた「聞き書き」のとりくみについて説明し、このとりくみの意義と成果について考察する。

「国際協力・技術移転・人材育成の現場を歩く」ことをテーマとし、発展途上国での夏季研修にとりくんできた関西大学商学部長谷川ゼミナールは、2011年3月11日の東日本大震災に際して、ボランティア派遣などの被災地支援に同年5月からとりくむようになった。しかし震災から1年が経過して、私たちは大阪から被災地へボランティアを派遣することに限界を感じるようになった。遠隔地であるため、学生ボランティアの派遣には費用がかさむ一方で、被災地でのボランティアニーズが高度化・複雑化し、学生では対応できないケースが増えてきた。つまり、遠隔地大阪の学生がボランティアとして被災地に赴く価値はなくなりつつあった。こうした事情から、私たちは学生ボランティア派遣に代わる被災地支援の方法を模索することになった。関西大学の学生の圧倒的多数は、東北地方を旅したことすらなく、縁もゆかりもなじみもない。一見すると被災地に関わることが不利なこうした状況が、有利にはたらく被災地支援はないか。

私たちは、その探索の途上で東京財団と共存の森ネットワークによる「被災地の聞き書きプロジェクト101」に出会った。このプロジェクトは、東日本大震災の被災者101名に、震災前の暮らしの様子を中心に震災後の状況や今後への想いを1対1で聞くものであった。「被災された方々が日常を取り戻していく上で拠り所となるのは、『被災地』という抽象的な括りではない、ご自身が積み重ねてきた日々の営み、暮らしに溶け込んだ生活文化ではないか」（東京財団・共存の森ネットワーク（編）『被災地の聞き書きプロジェクト101』2012年、3頁）。

聞き手が話し手の人生を丸ごと聞き、話し手自身の言葉で聞き手が文章化する「聞き書き」は、専門的知識や特殊技能が不要で、話し手を敬い謙虚に向き合う姿勢さえあれば、誰でもとりくむことができる。この「聞き書き」に、2012年夏に被災地（陸前高田と石巻）で研修を行うゼミ生たちがとりくんだのが、長谷川ゼミとしての「聞き書き」の第一歩であった。

2. 人生を丸ごと聞いて作品化する「聞き書き」活動のコンセプト

「聞き書き」とは、話し手と聞き手（ゼミ生）が一对一对向き合い、2時間程度で話し手のこれまでの人生を丸ごと聞き、それを話し手の言葉で文章にまとめることである。スケジュールとしては、春学期に「聞き書き」のための研修プログラムを企画し、夏休みに研修と「聞き書き」の作品化を行い、秋学期に「聞き書き」作品の普及活動（学内外での鑑賞会の実施と電子出版）を行う。

この「聞き書き」を実現させるには、第一に尊敬しうる話し手を遠隔地から探して見つけ、話し手となることを了解してもらうこと、第二に話し手や協力者に「聞き書き」を理解してもらうこと、第三に話し手の人生を聞いた後の文字起こしや編集を話し手の了解を得ながら進めることが必要となる。

3. 「聞き書き」の意図と意義

2012年度から学生たちがとりくんできた「聞き書き」は、陸前高田ではこれまでに「話し手」として14名の方に協力いただいた。その結果「聞き書き」がもたらすものが見えてきた。第1に、話し手が暮らす土地（被災地）に愛着が生まれ、話し手（被災者）と聞き手（学生）は親戚や家族のような関係になり、長期にわたってその交流は続いていく。縁もゆかりもなかった遠隔地大阪の学生が被災地・被災者と縁を結ぶ「聞き書き」は、長期にわたって震災を忘れず、被災地・被災者を思い、関わっていくためのプラットフォームと言える。

第2に、聞き手（学生）にとって話し手は、人生の先輩であり、生まれ育った環境も、価値観・世界観も異なる存在である。であるがゆえに「聞き書き」は、聞き手（学生）にとっては自らの生き方を見直す機会となり、話し手が聞き手の心に宿って「もう一人の自分」となる。「もう一人の自分」を増やすことによって、聞き手（学生）は多角的なものの見方や相手の立場でものを考えることができるようになっていく。

4. 今後の展望

これまで長谷川ゼミナールの聞き書きは、毎年3.11被災地（復興支援の現場）あるいは発展途上国（国際協力の現場）の数カ所で行われてきた。しかし、2017年度は研修地を陸前高田、研修期間を8月上旬と定め、聞き書きの相手（話し手）も基本的には、陸前高田で探すこととした。

同時に、作品の普及活動に力を入れて出版を急ぐとともに、「聞き書き」作品の鑑賞会（読書会）を陸前高田においても実施していきたい。

参考文献

代田七瀬・吉野奈保子(2012)『聞くこと・記録すること：「聞き書き」という手法』SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ事務局・国連大学高等研究所。

東京財団・共存の森ネットワーク（編）(2012)『被災地の聞き書きプロジェクト101』。

著者紹介

長谷川伸：関西大学商学部准教授、専門は経済学。2012年より陸前高田にて聞き書きなどの活動に取り組む。

住所：〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学商学部、E-mail: shin@kansai-u.ac.jp

